

素顔 '87

(4)



島山久尚博士

昨年秋、日本学士院会員になられた日本気象学会名誉会員島山久尚先生を東京下目黒の御自宅にお訪ねしてお話をうかがった。先生は現在満82歳になられるが、非常にお元気で、多方面で活躍を続けておられる。昭和28年から37年、41年から43年の間、本学会理事長をつとめられ、気象研究所長や気象庁長官を歴任された。今日でも学会誌をはじめ“気象”などにも健筆を振っておられるので、馴染みの深い会員も多いと思われる。

「それにしても気象学会も若い会員が多くなりましたね。学会に出ても顔を知らない人が大部分でしょうね。」

「先生が気象庁の前身である中央気象台に入られた動機は何でしょうか」

「東京帝国大学物理学科の卒業実験を、同じ弓道部の友人（知久健夫氏）と組んで、抜山大三先生（岡田武松先生の女婿）の実験室で行ったことがもっとも大きいでしょう。もちろん地球物理学に興味を持っていたので、抜山先生の紹介で中央気象台へ入ったわけです。」

「中央気象台に入って最初の配属は検定掛（今の測器検定室）で、担当させられた仕事は水銀気圧計、自記温度計などの測器の検定でした。当時の掛主任は小野澄之助技師でしたが、その助手として柿岡地磁気観測所へ出

張したりしました。これが私と地磁気あるいは地球電磁気との出会いです。ちょうどその頃、柿岡盆地に私鉄電車敷設の計画があり、それに関連して「電車線路からの漏洩電流による磁気的影響の実測」のプロジェクトがあり、実測の助手もやりました。近年の常盤線電化の問題にも、このときの報告書は役立ったと聞いています。入台2年目に柿岡地磁気観測所に、また昭和7年からは第二次国際極年の観測のために開設された樺太地磁気観測所（豊原）に勤務しました。高緯度の気温の低い土地での徹夜観測では、いろいろ珍しい現象が観測ができました。また地磁気の自記紙上に現われる、いわゆる湾形変化と脈動が柿岡で見慣れていたものに比べて、大変顕著に現われることに気がきました。これが後年、学士院賞をいただいた研究のきっかけです。」

「私は地磁気ばかりでなく、身のまわりのいろいろな現象に興味を持って調べてみました。そしてそれらの結果がまとまると「気象集誌」「天気と気候」「科学」「雪氷」「測候時報」などに掲載して貰いました。火災に興味を持ったのは、関東大震災の体験が発端です。また樺太での地磁気の観測がきっかけで、雷電の研究に興味を持ちましたが、これは後年、日本学術振興会雷災防止第9特別委員会の前橋付近の雷雨特別観測の解析に発展しました。また全く別の分野で、都市気候の研究や風に関する小気候の研究なども手をつけました。」

先生のお話は興に入って午後中お話を伺ったが、紙面の関係で載せられないのは残念である。天気24巻12号（1977年）、気象研究ノート100号（1969年）に掲載されている先生の一文にその内容の一端をうかがうことができる。

「最後に若い会員へ一言」

「専門の狭いテーマを深く研究することも大切だが、視野を広くして、いろいろなことに興味を持つことも大事だと思いますよ。」

先生は高校時代から弓道に励まれた他、登山もおやりになり、絵を画かれたり、気象の切手の蒐集など多趣味であられる。先生の書かれている気象の切手の連載を読むのがたのしみに、気象協会発行の“気象”を開く読者もあるという。

気象学者は自然を相手に研究を続けるためか年をとっても現役の研究者として活躍される方が多い。先生の今後の御健康をお祈りして薄暗くなったお宅を後にした。

（河村 武）